# 宋代の禅から世界の ZEN へ―西洋禅の誕生

ディディエ・ダヴァン

## はじめに

唐代に始まって、現代まで続く禅の長い歴史には、複数の流派とそれに伴う多くの禅風が見られるが、思想史の観点からは、基本的な見解と実践法は宋代に完成したと言える。無論、その後の思想的展開が完全に停止してしまったというわけではなく、さらに世界に広まった現代禅が宋代と全く同じものであるというわけでもないが、教えと修行法の根本的な原理を見れば、宋代に出来た「看話禅（かんな）」は、今日まで大きな変更なく続いていると言える。そのため、現在の中国、韓国、ベトナムや日本といった東アジア諸国だけではなく、禅の展開の終着点と言えるアメリカとヨーロッパの禅も宋代禅の延長にあるということができよう。しかし、アジアの国々の場合は納得できるとしても、西洋に出版される多数の禅をテーマにした書籍を見れば、その根底に宋代禅が本当にあるのかと疑問を持つ部分も存在している。実際、英文など欧米の言語で描き出される「ZEN」は、中国、韓国や日本に見られる「禅」とは、かなり相違したものに見える。たとえば、『禅とオムツ替え』（*Zen and the Art of Changing Diapers*、1993）、『禅とボディビルディング』（*Zen in the Art of Body Building*、2010）のように『禅と○○』（「Zen and/in the art of…」）と題した書籍の数々とその驚くべき内容を見れば、宋代禅だけではなく、そもそも「禅」からも随分と掛け離れたものである印象を受ける[1]。また、テキストだけではなく、実践の場である様々な「ゼンセンター」を見ても、その組織や運営形態が、日本の禅寺と似て非なるものであることに違和感を覚える人も少なくないであろう。その上、禅とまったく無関係なエステサロンやリラクセーショングッズまでに「Zen」というラベルが貼られていることによって、中国や日本、

[1] 西洋における禅のイメージについて山田奨治、『禅という名の日本丸』、弘文堂、2005 年を参照。

韓国などに見られる「禅」とこのような西洋の「Zen」との差異は一層際立つ。このように見ると、西洋の「Zen」は、宋代禅を受け継いでいないどころか、単なる誤解と偏見に基づいたステレオタイプに過ぎないということも可能となってくる。

確かに、西洋が抱く禅のイメージに大きな偏見とステレオタイプが存在することは間違いない。しかし、アメリカ、ヨーロッパ、そして世界中にまで広まった「Zen」を単に「真の禅」を理解できなかった西洋人の作り物だと片づけてしまうと、その「Zen」の本質だけでなく、アジア――とりわけ日本――の禅思想史の重要な動きまで見落とすことになってしまうであろう。じつは、西洋の禅の成り立ちを探ると、それは十九世紀の日本の禅にたどり着く。また、その時代の禅を理解するためには、さらに溯って、中世からの日本の禅の流れを考慮する必要がある。そしてさらにその源流は求めれば、やはり宋代禅へとたどり着くのである。本論では、西洋禅の誕生を考察するために、宋代禅が中世の日本に伝わって以降の日本の禅の歩みとその特徴の検討を試みるものである。

## 宋代から日本近代へ：日本禅の特徴

### 1- 日本禅宗の専門化

禅は中国に誕生し、朝鮮とベトナムにも伝播されたが、西洋に普及した禅は日本の禅であった。その理由として、当時の国際状況におけるアジアの国々が弱い立場にいて、西洋への影響力が極めて限られていたという歴史的事実が上げられる。明治時代以降、近代化に力を入れて西洋に近づいた日本の発信力が、それらの国々に比べて優位にあったことは間違いないでああろう。ただしそれだけでは、なぜ禅が日本から西洋に展開したのかを説明できない。西洋の禅が誕生した過程を理解するには、まず日本の禅の特徴を把握する必要があるのである。

中国から日本まで、宋代以降の禅は大慧宗杲（1089-1163）などによって完成された「看話禅」を基盤にしていた[2]。しかし、だからといって中国、

[2] 日本では曹洞宗が異なる教えを唱えた事は大きな例外になることは周知の通りである。しかし、日本曹洞宗の歴史にも看話禅は大きな地位を占めている事を忘れてはならない。

朝鮮や日本の禅がすべて同じものであったわけではない。同じ基本を共有しても、歴史的な背景とそれに大きく影響される思想史が異なるため、禅が発展した環境は様々であって、時代と地域によって禅宗は、それぞれ違う方向へと発展したのである。その変化がそれぞれの禅思想史を作り上げるわけであるが、当然その詳細をここで述べることは不可能である。しかし、大きな傾向として、中国では念仏を禅の修行に取り入れていったこと、また朝鮮では華厳宗との複雑で、かつ今日まで続く時に激しい対話が行われることによって、中国と朝鮮はそれぞれの禅宗を形成したといえる。無論、日本でも、日本独特の禅宗が発展した。筆者の考えではあるが、西洋に禅が普及された過程を考察するにはその日本の禅の特徴が大きな鍵になる。

日本の禅がいつ誕生したのかを正確に言うことは難しいが、おおよそ十三世紀半ばから――つまり中国史でいうと宋の時代に――臨済宗と曹洞宗が定着していたといえる。日本における初期臨済宗の最大の特徴は密教との融合であるが、その後、蘭渓道隆（らんけいどうりゅう）（1213-1278）を始めとして、中国から渡ってきた禅師、そして留学した大勢の日本僧によって、中国により近い禅風が日本に定着した。とはいえ、これによって中国と全く同じ禅が定着したということではなく、特に人気を博していた念仏と禅の兼修は日本で流行ることはなかった。14 世紀に、五山制度が設立されて、臨済宗の大多数の寺院とそれに属する禅僧は幕府の傘下に入った。この五山は、禅だけでなく、中世の日本仏教全体に凄まじい影響力を持つようになった。五山の禅は、それ自体が多様多彩であって、一括りにしてその思想の内容を語ることは不可能であるが、重要な共通点は禅の教えを唱えながら、経典に説かれているその他の教義を完全に否定しなかったことである。それは、誤解されやすいながらも頻繁に使われる用語で表現すれば、「教禅一致」である。その意味を極端に簡略化して示せば、禅が優位な方法ではあるが難易度が高いので、その修行で悟れない人々には念仏などのようなもっと歩みやすい道も認められていたということである。つまり、「教禅一致」とは「禅」と「教」（ブッダが言葉で説いた教え、仏典に書いている教え）が同じレベルにあるということではなく、むしろ最終的に同じ目標を目指しているということなのである。その考えを説いた僧の代表として夢窓疎石（1275-1351）が挙げられる。そして、その「教禅一致」の常識を破って、日本禅の大きな転回を作ったのは大燈国師（宗峰妙超、1282-1337）から

始まる大燈派であると筆者は考えている。

大燈派の最大の特徴は、それまで禅宗において認められていた「教」を強く拒否し、「禅」しか許さない立場を取ったことにある。つまり、人の能力と関係なく、悟りに至るには禅――具体的には看話禅――の他に道はないと主張したのである。五山が力を持っていた時代には、そのような考え方はあまり影響力がなかったのだが、応仁の乱以後の歴史の変動によって幕府と共に五山制度が衰退し、近世になって大燈派が徐々に主流となったことにより、「教」を排除して、「禅」のみに頼る態勢が自然に日本の禅の常識となっていったのである。しかも、近世では禅宗のみならず仏教の様々な宗派が、説法や書籍を通して自分の教えを社会に普及させる努力をして、仏教の教義が広く知られるようになったのである。禅でいうと、「仮名法語」という入門書の一種が多く刊行され、そこに、たとえ初心者であっても、救われるためには、悟りを開く他に道はなく、悟るには公案に基づいた修行、つまり看話禅に励まなければいけないとしばしば書かれている。このように、禅のみを説き、宋代に成立した看話禅を大衆にまで勧めたことが日本の禅の最大の特徴である。

### 2- 在家と禅の新使用

日本独特の禅観が社会に広まったことによって、禅の修行に挑もうという在家者が増えた。西洋の禅の誕生を考えるには、在家の参禅者達の存在は非常に大事である。在家信者自体はもちろん仏教とほぼ同時に現れたため、日本または禅の特徴とはいえない。また、俗世にいながら禅の修行に励むことも中国によく見られることであり、禅僧達が多数の士大夫に看話禅を教えていた動きを無視して宋代禅を語れないほど重要な現象であった。しかし、それらとは別に、日本での在家の参禅者達は、日本にしか見られない役割を果たしたのである。

臨済宗に絞って言えば、中世には、禅僧達は限られていた上流階級の在家としか交流していなかった。まして、参禅となると、その人数はさらに限定される。しかし、近世になるとその状況が一変して、徐々に禅の教えは日本社会に知られるようになって、「仮名法語」や大量に刊行された禅籍を読むだけではなく、禅僧の教えを直接受けて参禅したいという人達が増えた。特に現代でいうインテリの間に近現代までに続いた一つの流行になったそうである。有名な例として千利休、松尾芭蕉、西田幾多郎、夏目

漱石などの名を挙げることができる。

さらに興味深い現象として、文化人の間で禅を利用して様々な芸が論じられるようになった。その現象については、まだ完全に開明されきっているとは言いがたいが、一つの傾向として時代が下ると共に色濃くなっているように思われる。例えば、芭蕉の有名な「古池や蛙飛びこむ水の音」の解釈を見ると、当初は禅的要素がほとんど用いられないものの、明治時代に入った頃には、芭蕉が悟りを開いた際に読んだ句であるという解釈が、常識になったといえるほど盛んになっていた。

また、禅で解釈するだけではなく、禅の修行が茶の湯、俳諧、剣術などに役をたつという考えがいろいろなテキストに見られるようになる。つまり、仏教の一宗派でありながら、禅宗が提供する修行は、仏教の目標である解脱だけではなく、芸術や技術での向上の手段としても有効であるとされていったのである。その考えは日本人すべてに共有されていたわけではなく、限られた人々の間にしか流行しなかったのだが、その傾向は近代まで続き、しかも影響力の強い文化人に強く根付いていた。また、その延長線上には、禅修行を通して何らかの形で自分を強く出来るという発想が生まれ、特に日露戦争の頃に「修養」が爆発的に流行するにあたって、「禅は精神鍛練の妙法」としてもてはやされるようになった。敵視していた西洋――ロシア――に東洋の手法である禅で勝ろうという発想もあって、参禅が一層流行したそうである[3]。

## 近代日本と仏教界の試練

ここまで来れば、西洋の禅の誕生を語るために、なぜ中近世の禅を振り返る必要があったのかが明らかになったであろう。「禅」が「西洋」に伝来したというよりも、幾つかの特徴のある「日本の禅」が、西洋に伝来したともいえる傾向が、ここに見られるのである。

しかし、それでもまだ正確性が欠けている。なぜなら、日本の禅も西洋も、けっして恒常不変だったわけではなく、時代と共に変化してきた。となると、「西洋の禅」はある時期の日本の禅とある時期の西洋との出会い

[3] 王成、「近代日本における修養概念の成立」、『国際日本文化研究センター紀要』、29、2004、p. 111-145。

を背景に誕生したということになる。その二つの環境を正しく理解することは当然非常に大事になる。近世には宣教師と禅僧の対話が行われて、「禅」と「西洋」が出逢っていたが、その時に西洋の国々に禅が広まることはなかった。日本の禅宗がある程度の知名度を得始めたのはやはり二十世紀である。つまり、西洋（まずアメリカ、その後ヨーロッパ）に紹介され、やがて定着したのは二十世紀の日本の禅であった。そしてこの二十世紀の日本の禅の特徴は、禅宗が明治時代に直面した二つの試練によって形成されたものといえる。

その一つは廃仏毀釈である。明治時代に入ってすぐ、神仏分離政策の下に公布された様々な法律は、寺院の経済基盤や僧侶の生活などに強大な打撃を与えたが、その具体的なダメージに衰えない程大きなショックを与えたのは思想的な批判であった。日本仏教の長い歴史では、宗派同士や、または他の宗教との争いはなかったわけではないが、その大前提として仏教が日本社会の一部であることが当然認められていた。しかし、廃仏毀釈の時期になると、外来の教えと見做された仏教の存在意義自体が厳しく問われるようになったのである。その結果、日本仏教の各宗派は、それぞれに自分の教えを再検討し、自分の伝統を守りながら時代に適合した形で再構築をする必要に迫られたのである。それは日本仏教史上の最後の大きな変化であったといえる。

臨済宗を見ると禅僧によって対応が異なったが、見性（悟り）の体験が、実験を重視する科学に通用することをアピールしたり、または在家の参禅に本格的に取り組んで、社会との連帯を強めたりすることなどが行われていた。また、近代化と西洋化の境目がぼやけていた時代にあって、仏教の伝統的な問題点を西洋思想の観点から解釈し判断するようになったことにも注意すべきである。

しかし、近代仏教の最大の危機となったのは二つ目の試練であろう。それは所謂「大乗非仏説論」である。当時、仏教の文献は、パーリ語で書かれた文献が古いものと見做されていて、大乗仏教はサンスクリット語の文献にしか見られないので、大乗文献が後に作られたテキストであり、よってブッダが説法した教えと異なるという論理である。現在の研究者達が指摘するように、言語だけでテキストの前後を判断することはできず、大乗と小乗の関係は複雑で、そもそも真の仏説を求めることは無意味であるとされているが、明治時代には「大乗非仏説論」は科学的アプローチによる

最新の文献学に基づいていた学説であったため、信憑性がかなり高いものとされ、日本仏教全体に大きな影響を及ぼしたのである。

以上をまとめると、二十世紀に「西洋」に広まった「禅」は、明治時代に厳しい状況に直面して、時代に対応をせざるを得なかった日本の禅――特に臨済宗――であった。すでに述べたように、「西洋」と「禅」は、普遍的な概念としてのではなく、その時代ごとの状態で考えるべきものであるため、まず「禅」を「明治維新で変化した日本の禅」で置き換える必要があった。それと同じように、「西洋」も、当時の欧米の特徴を考えて定義する必要がある。特に、欧米が抱いていた「東洋」と「仏教」のイメージを、しっかりと分析しておくことが必要となるであろう。

## 欧米が見た東洋と仏教

欧米にとっても十九世紀は激変の時代であった。産業革命がもたらした経済発展が社会の構造全体を変えた。国際的には、ヨーロッパの国々が、先端技術を武器に植民地という形で領土を増やし、世界の軸となるに至った。また、はなはだしい科学の進歩を見て、人々が、まさにそれを全知全能と思うような時代でもあった。思想的な面では、合理主義や実証主義の黄金時代にあり、理解不可能と思われていた謎が解き明かされ、医学などが、続々と奇跡にも見える進展を見せていた。

その一方で、宗教――特にキリスト教――の影響が徐々に減退している時代でもあった。世界の誕生から存在意義までを説いていた宗教の様々な教義が、進化論などの学説に否定され、これは以前から始まっていた現象であったが、宗教と学問がより遠ざかっていった。無神論を訴える人が増え、いろいろな面で、宗教や不可思議な存在（たとえば日本でいう妖怪など）を素直に信じる人が減っていったのである。

その時代の動きに対して、大きな反動が見られた。ロマン主義運動に代表される多様な活動が、理性を優先する科学の新知識に物足りなさを感じる数多くの人々によって繰り広げられたのである。そのため、十九世紀は科学が大きく進歩した時代でありながら、降霊術や秘教などが流行り、聖母の出現のような奇跡が続々と報告される時代でもあった。一見矛盾にめいているが、その両面性こそ、この時の欧米の最大の特徴だったといえるであろう。そして、その構造が、アジアおよび仏教との出会いにも強く反

映される。

アジアの存在は古くからヨーロッパに知られていたが、強く意識され始めたのはまた十九世紀であった。その国々の言語、文化などが学者達に研究され始め、いろいろな面で知識が増えた一方、偏見や幻想に基づいて美化されたイメージも流行し始めた。その理想のアジア――「東洋」――の魅力の一つは、謎に包まれた思想であった。特に、それが冷たい理性主義を優先してしまった西洋が見失った重要な「何か」を保っているようにみえたところに惹かれたといえる。そして、東洋の重要な要素として注目を浴びたのは仏教であったが、西洋の仏教解釈は、「東洋」に対するそれと似た二面性を有していた。

続々と仏典が翻訳刊行され、それらの分析によって、仏教の学問的な知識を得ることが可能になり、学者と文化人の間で、時にレベルの高い知的成果が出回るようになった。しかし、このようにして「仏教学」が誕生したからといって、欧米全体に正しい仏教のイメージが広まったというわけではなかった。幻想に基づいた「東洋思想の真髄」を追求するために、仏教に感心を持つ人たちも少なくなかったのである。状況はかなり複雑であって一言で表現することはできないが、簡略化すると十九世紀の欧米に「仏教学」と「幻想の仏教」（例えばオカルト信仰と混ざった仏教など）が共存していたと言える。しかも、その境目は非常にぼやけていて、学者の間でも「幻想の仏教」が流行したりすることもあった。その微妙な絡み合いこそ十九世紀の欧米の仏教観の最大の特徴であろう。

ただし、学者と幻想の仏教を求めていた人達の間に、大きな共通点もあった。それは、現代の仏教ではなく、ブッダの真の教えにのみ興味を持ったことである。実際、仏教学者のほとんどは、ブッダの教えとその後に宗教として展開した仏教とを分けて考えていた。そして、後者に対する感心が非常に薄かった、というよりもむしろ軽視していたといえる。当時の一般的解釈は、ブッダには素晴らしい哲学があったが、後に余計な迷信、儀礼や現世利益を求めた祈祷などが加えられて、単なる「宗教」に堕ちてしまったというものであった。それゆえ、仏教が人気を得ていたにもかかわらず、実際にアジアに存在している仏教はさほど注目されなかった。当然ながら、禅も同じであって、片手で数えられるほどの例外を除けば、十九世紀の欧米人は関心を示すことはなかった。その上、既に述べた大乗非仏説論が普及していたため、当時東アジアに展開していた仏教は、そもそも本当の仏

教ではないと思われていたのである。

このように、「禅」と「西洋」の出会いの前夜には、日本仏教全体がかなり厳しい立場に置かれていたといえる。逆に言えば、後に禅が西洋に流行ったことは、欧米の人々が自然とそこに魅力を感じるようになったからではなく、偏見と幻想による深い溝を渡るための架け橋が作られたからである。架橋は何人かの手によってなされたが、とりわけ無視することの出来ない存在が釈宗演と鈴木大拙である。

## シカゴの大乗仏教から西洋の禅へ

### １ー釈宗演

釈宗演（1859-1919）は禅が西洋に広まるにあたってのキーパーソンといえるのだが、宗演自身の禅に関する講演等は、それほど大きな影響を与えていない。禅を欧米に広めたというよりも、その普及を可能とする地盤を築いたといった方がいいかもしれない。しかし、19 世紀の西洋の仏教に対する態度と、明治期の日本仏教の厳しい状況を思えば、それは決して当たり前な事ではなかった。若くして建長寺の管長になった宗演は、日本仏教の問題点を当然把握していたが、後に慶應義塾大学に学び、セイロン（現スリランカ）に留学したこともあって、哲学や科学、さらに世界の仏教の状況と仏教学の最新の成果も熟知していた。無論、欧米の仏教観は宗演一人の働きによって変化したわけではないが、それに大きく貢献した人物である。その活躍の出発点になったのはシカゴへの旅であった。

1893 年、シカゴ万博の傍らで、世界中の宗教から代表者を集めた「万国宗教会議」が開催された。表には、それは様々な宗教間の対話を促すことが目的であったが、主催者の意図を探れば、キリスト教の優位を世界に示すための集会でもあったようである。一方で、植民地支配者の宗教であるキリスト教よりも自分たちの教えの方が優れていることを証明しに行こうという気持ちで挑むアジアの参加者も多かった。つまり、宗教間対話というよりも、教義を競う場であったといえる。

日本の代表団にも、日本仏教をアピールする意図は当然のように存在していた。その一人として参加した宗演は、「仏教の要旨並に因果法」（The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha）と題した講演を行い、当時の状況や西洋人の見解と期待に対する鋭い理解に基づいて巧みにキリス

ト教を批判しつつ、大乗仏教を弁護したのである。興味深いことに、禅には一切触れられてなかった。その意味では、西洋人の常識、宗教観などを強く意識した仏教の教義を紹介する内容であったといえるが、特に仏教の科学的な面を強調しながら、大乗仏教を新しい観点から示して見せたことは大いなる成果であったといえよう[4]。その演説がすぐに受け入れられたとはいいにくいが、宗円が、その後の活動（講演や本の出版など）によって大乗仏教観を一変させた一人であることは間違いない。そして、その時に蒔いた種がいろいろな形で後に実を結ぶことになった。詳細を省くが、その最大の果実が、彼の元で参禅していた在家居士、鈴木大拙であった。

### ２－鈴木大拙

鈴木大拙（1870-1966）は、独自の思想を発展させた著名な学者であり、その特徴的な活動は多岐にわたるが、先に述べた在家の参禅者の伝統を受け継いだ一人でもある。

円覚寺で釈宗演などの指導を受た鈴木は、西田幾多郎や夏目漱石の禅の仲間であった。英語に堪能であったため、宗演のシカゴでの講演の英訳を担当し、さらに後には英語で数々の本を出版している。宗演の紹介によって、仏教に関心を寄せていた思想家ポール・ケーラス（1852-1919）のもとで 10 年ほどアメリカで活動した。日本の禅の在家参禅者で西洋の思想を知っていた鈴木は、日本の禅を伝えるに最適な存在であったといえるが、彼の作品を見れば分かるように、彼は最初は禅ではなく大乗仏教について論じていた。仏典の翻訳などを除けば、鈴木の最初の著作は 1907 年に英語で刊行された『大乗仏教概論』（Outlines of Mahāyāna Buddhism）であるが、そこには宗演とケーラスの影響が感じられる。しかし、この書は、仏教学者達から厳しく批判されることになる。特に著名なベルギー人学者であるルイ・ド・ラ・ヴァレ・プサン（Louis de La Vallée-Poussin, 1869-1938）が厳しい批評を書いている。それだけが原因ではないだろうが、その後の鈴木は、大乗仏教よりも禅をテーマにした論文を出すようになった。

---

[4] 釈宗演の大乗仏教観について馬場紀寿、「釈宗演のセイロン留学――こうして「大乗仏教」が生まれた」、『図書』第 818 号、2017 年 4 月。また、同題のより詳しい論文は「釈宗演遠諱 100 年記念特別展『釈宗演と近代日本―若き禅僧、世界を駆ける―』」（慶應義塾大学図書館、2018 年）の図録に掲載されている（pp. 152-160）を参照。

1927 年に出版された『禅論文集』（*Essays in Zen Buddhism*）や 1934 年の『禅仏教入門』（*An Introduction to Zen Buddhism*）と『禅堂生活』（*The Training of a Zen Buddhist Monk*）が人気を博したことにより、鈴木の名が世に広まった。

西洋人に禅を紹介した英語の本は鈴木の著作だけではなかった。すでに 1900 年には新渡戸稲造（1862-1933）が『武士道』（*Bushido: The Soul of Japan*）を、1906 年には岡倉天心（1863-1913）の『茶の本』（*The Book of Tea*）を、また 1913 年には忽滑谷快天（1867-1934）の『サムライの宗教』（*The Religion of the Samurai*）が刊行されていたが、その反響は鈴木の本とは比較にならない。禅が欧米で広く知られるようになったのは、鈴木一人の働きによるといっても過言ではないほど、彼の果たした役割は大きかったのである。さらに言えば、鈴木が伝えた禅が西洋の禅の基盤になった。では、それはどのような禅だったのであろうか。分かりやすくて短い答えは『禅と日本文化』という著名な本にある[5]。

> 簡単に云えば、禅の哲学は大乗仏教のそれであるが、禅にはこの哲学を体験するための一種特別の方法がある。それはわれわれ自身の存在、すなわち、実存そのものの秘密を直接に洞察することである。べつに仏陀の言葉や文字の上の教えにしたがったり、また、より高い存在を信じたり、また、戒律的な鍛錬の公式を実践したりすることなどによらないで、ある内的体験を無媒介的に得ることである。これは直観的な理解の方法に訴えるものであり、日本語で「悟り」といふ体験がそれから起る。

西洋人向けに書かれた英文が日本語に訳されたので、少し見慣れない感じがするかもしれないが、ここには明治以降の日本の禅が見事に要約されているといえよう。「禅の哲学は大乗仏教のそれである」は、もちろん「大乗非仏説論」の攻撃があったことによって意識されたものである。また、「自

[5] この本の作成はやや複雑である。元は講演録であって、1938 年に「Zen and Its Influence on Japanese Culture」として出版された。そして、部分的に書き直して 1959 年に「Zen and Japanese Culture」という題で再版された。日本語訳もまた複雑であるが、説明は省く。

身の存在、すなわち、実存そのものの秘密を直接に洞察する」は、悟りに達することであるが、始めて読む二十世紀前半の欧米人が分かるように巧く説明されているといえる。そして、「仏陀の言葉や文字の上の教え」や「より高い存在を信じる」ことに依らないことは、まさに経典の教えを拒絶した大燈派の根本的な姿勢である。これは鈴木の思想ではなく、ただ分かりやすく「禅」を説明しているのだが、それは日本にしかない大燈禅である。さらに正確に言えば、ここで示されているのは、大燈禅の延長線にある白隠禅なのだが、本論で検討している問題からみて大きな違いはない。鈴木が大燈禅の伝統を西洋に運んだということなのである。

因みに、『禅と日本文化』が禅のステレオタイプを産みだしたという理由でしばしば批判される。「俳句」、「武道」、「茶道」などと言えば、欧米人達がすぐさま禅と結びつけてしまうのは、その本の中で鈴木がその誤った繋がりを示したからだというのである。『禅と日本文化』の影響がそれだけ大きかったことは間違いないが、その批判は、重要な歴史的事実を見落としていると筆者は思う。それは、鈴木が勝手に俳句や茶などを禅で解釈したのではなく、江戸時代から在家参禅者のあいだに存在していた流れを、そのまま多くの人々に知らせただけだったということである。あくまでも、鈴木は、大燈禅が産みだした伝統を世界に紹介したということなのである。

## まとめ

鈴木の影響を受けて、というよりも彼が紹介した禅に基づいて、欧米の思想家達は日本や「東洋」の理解を展開した。ルース・ベネディクト（Ruth Benedict, 1887-1948）の『菊と刀』[6]（*The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*、1946）やオイゲン・ヘリゲル（Eugen Herrigel, 1884-1955）の『弓と禅』[7]（*Zen in der Kunst des Bogenschießens*、1948、英訳 1953）またはレジナルド・ホーラス・ブライス（Reginald Horace Blyth, 1898-1964）の『俳句』（*Haiku*、1949 ～ 1952）は早い例であ

[6] 前川亨、「美と修養――鈴木大拙とルース＝ベネディクトの接点を求めて――」、『専修人文論集』第 88 号、2011、p. 291-319。
[7] 山田奨治、『禅という名の日本丸』、前掲

るが、いずれも、現在も書店に並べられているほどのロングセラーで、禅のみならず欧米の日本のイメージまで作りあげたものである。1950 年代後半では、鈴木に影響されながら独自の理解を発展したアラン・ワッツ（Alan Watts, 1915-1973）が登場して、『禅道』（*The Way of Zen*、1957）やエッセイの『ビート禅、スクエア禅と禅』（*Beat Zen Square Zen and Zen*、1959）は特に若者に人気を得て、カウンターカルチャーに禅を流行らせた。そして、ジャック・ケルアック（Jack Kerouac, 1922-1969）の『ザ・ダルマ・バムズ』（*The Dharma Bums*、1957）の延長線に 1974 年にロバート・パーシグ（Robert Pirsig, 1928-2017）が『禅とオートバイ修理技術』（Zen and the Art of Motorcycle Maintenance、1974）を刊行した。その後、この『禅とオートバイ修理技術』の「禅と～（Zen and the Art of...）というタイトルに倣って、禅と関係がなくても――多くの場合はユーモアを込めて――『禅と○○』と題された本が続々と刊行されるようになった。「はじめに」で引用した『禅とオムツ替え』と『禅とボディビルディング』などは、まさにその好例なのである。

60 年代以降の様々な変化を経て、偏見や誤解を含めた禅のイメージが現在の「Zen」に繋がっている。その上、そこにマーケティングも絡むようになったから、時にクスッと笑いたくなるような結果がもたらされるようになった。しかし、溯ればこの「Zen」は鈴木が説いた「禅」に由来していて、鈴木の禅は白隠禅であって、白隠禅は大燈禅の延長にあって、大燈禅は「看話禅」に復帰しようという運動であった。その看話禅は、他でもない宋代禅の産物である。このように、「Zen」を見つめれば、現代の西洋の禅だけではなく、日本の禅の特徴までもが見えて来るのである。